

共に生きて

I

紙面についてのご意見、感想をお寄せください。メール、ファクスで受け付けます。郵送の場合は〒810-8721(住所不要)、西日本新聞生活特報部へ。

生活特報部 FAX 092 (711) 9056 メール seikatsu@nishinippon-np.jp



登山 万佐子

「俺だって本当は泣きたかった」。低出生体重児(未熟児)の家族会のあるお父さんの言葉が耳に残っています。わが子が早産で小さく生まれ、命の危険にもさらされるという突然の事態に、お父さんだって動揺し、不安でいっぱいだったはずです。

私の夫(45)も孤軍奮闘していました。長女綾美(8)を緊急出産したあの日、かかりつけの産院の診察室の外で医師から「奥さんもお子さんも(生存率は)半々です」「覚悟してください」と言われた夫。泣き叫ぶ長男(14)を連れ、救急車を追いかけて運転した時間はぎゅっと生きた心地がしなかったと思います。

大病院に着くと私は既に手術室。麻酔で眠っていました。夫の到着と同時に手術の同意書にサインしてもらおうと、病院スタッフが待ち構えていたと思います。私と娘の現状と今後の治療の説明、同意書へのサイン、2人分の入院

父親たちも不安抱え

院手続き…。命を左右するような決断も求められたでしょう。夫は、何をどう説明されたか全く覚えていないそうです。覚えてるのは、主治医の視線と面談室の張り詰めた空気だけ。

夜が明けると、自分と私の職場、息子の幼稚園に休みの連絡をし、娘の出生届や未熟児養育医療給付制度の申請などで役所にも行かなければならなかったようです。娘の命がどうなるか分からない状況が続く中、自分がしっかりしなければという気持ちだけで踏ん張っていたといいます。病院のベッドで体の自由が

クリスマス会で子どもたちとゲームを楽しむお父さんたち



きかない私は知る由もありません。私が当時の夫の気持ち、自らの命が危なかったことを聞いたのは、2年半後に家族会で体験手記集を作ったとき。夫が涙を流したことも、このとき初めて知りました。

家族会には、子どもの生存率や障害が残る確率を説明されたお父さんもいました。ご夫婦で参加される方もいます。子どもが早産で小さく生まれ、多くの困難を乗り越えていく中で、夫婦の絆、家族の結束力が強くなったと語る家族がいる一方で、離婚に至った家族も何組か見えてきました。

お父さんたちだって、子どもが誕生した日のこと、成長の喜びと不安を話したいはずですが、母親たち以上に話す場や分かってくれる相手がいらないのではないのでしょうか。そこで誕生したのが、お父さんの会です。その名も「DNの会」、タディNっ子の略。お父さんたち自身が命を命しました。

初めて集まった夜、初対面の方、お酒が全く飲めない方もいましたが、何と5時間も話が尽きなかったそうです。お父さんたちに共通していた思いは「僕の子どもに生まれてきてくれてありがとう」。お母さんの笑顔だけでなく、お父さんの笑顔も子どもたちの大事な栄養だなどと思います。

(「Nっ子クラブ カンガルーの親子」代表、福岡県筑紫野市)